

八点

②揺らぎなき大地ありけり赤とんぼ

増田 守

赤とんぼの生育範囲は、月よりも遙かに低い空域にあり、一部には地面も含まれる。その意味では、赤とんぼによつては地震の起きた瞬間に出会っていることもあるであろう。日本人の不幸は、地球の造山運動が未だ終わっていないこの列島に住み始めてしまったことにあるのだろうか。近い内の大地震の発生も予測されている。

六点

①百選てふ湧水汲めり薄紅葉

藤本 友子

御殿場線の山北から徒歩三十分くらいのところの酒水（しゃすい）の滝に行った時の句です。今年は、夏に台風が多かったので、水量が豊富でも見事な滝でした。その近くに名水百選と言われる湧水が勢いよく出ていました。一口飲んでから、早速ペットボトルに汲んで持ち帰り、おいしいコーヒーを頂きました。ちょうど辺りの紅葉が美しかったので、取り合わせました。

①列島の壊れしままに月わたる

増田 守

地震、雷、火事、親父は、日本で古くから怖いものとされる順番であるが、今年は台風や大雨、地震が相次ぎ、国土は、癒して休む暇もない。天にある月は、下界の日本列島の有り様とは関係なく、計算された通りの運行をただ続けるだけである。

五点

半襟の白光りをり秋うらら

岩野ヤエ子

地下鉄で、中年の和服の女性の隣になりました。髪を結い上げた項は綺麗で、着物をしっとり着こなした上品な感じのする方でした。お茶会にでも行かれるのでしょうか。ふと横を見ると半襟がふっくらとしており、そのまゝは白く光っていました。やはり和服は素敵と、思いました。

荒れはててなほ門構へ月煌々

恩田 才美

しばらくぶりに鎌倉を歩きました。この地の特に家々の佇まいの変わり様は、歴然としていて谷すじを埋める無個性の新興住宅を遠いもののように感じました。そんな中、門構えを残す無住の邸に出会いました。門は、その家の歴史の証人のようにまぶしく堂々と建っていました。

義経無念北上川の秋入日

藤崎安紀子

平泉の中尊寺へ行った時、近くの高館義経堂へも立ち寄りしました。ここは、義経最期の場所と言われています。戦国時代とはいえ、実の兄頼朝に追われ、ここ平泉でついに殺害されてしまうという悲惨な話はあまりにも有名です。高館から下をながめると北上川がたゆたうと流れ、夕日が川面に映えて赤く染まってみえました。

③ 深く死ぬ覚悟（教育）を叩き込まれた幼少期と、健康長寿が賞賛される現在との命の重みの違いを痛感しております。

京林 眞壽

深く死ぬ覚悟（教育）を叩き込まれた幼少期と、健康長寿が賞賛される現在との命の重みの違いを痛感しております。

② 散骨の欠片集めし星月夜

松浦かほる

九月に私の両親の墓じまいをしました。骨壺から共同墓地の中にまかれた骨は、闇の中に白く光り、目に焼き付きました。その時は涙は出なかったのですが、暫くして夜空の中に欠片のように散らばっている星を見ているうちに、すーと自分でも思いがけない涙が出ました。散骨の時の細かな白さまで思い出したのです。

① しなやかな余生覚ほゆ秋日和

桜井 幸枝

この句を詠んだ時の気分には今なれなくて、自句自解の葉書を前にしばし茫然……。ほんのひとときであったか。穏やかな気持ちになった秋の草花は競うこともなく、自分もせかせかぎしぎししているものもすっぱりと抜け落ち、考えてみれば無の状態。無になれば何かがやさしく入って来る「まあいいか」とやや、いい加減な余生、「しなやかな」の表現で良かったか？と。

① やはらかく子を抱き替へて秋桜

恩田 才美

酷暑、風台風。今年はコスモスの受難の年でした。それでもコスモスを詠みたいと久里浜の丘陵へ。案じていた通り見るもいたましい有様。健気に咲く一群に人が集まっていました。コスモス↓風↓揺らぎ。類想を避けたかったのですが、若い家族とコスモスを合わせてみました。

術後の日々目を閉じおれば秋の声

藤崎安紀子

右目の黄斑上膜の手術をしました。網膜をさわる手術でしたのでとても怖く、しばらくは目を使わないように安静にしていなければなりません。視力を封ざると、代わりに聴力がとても鋭敏になり、いつもは気づかなかった風の音や雨の音、虫の声などが、鮮明に聞こえ秋の気配を感じる事ができました。

冬支度促す如く風の声

平野 邦子

何かと忙しい日々、今年は早めに冬の準備をしようと思っていました。でも、なかなか進まない時にふと窓を開けたら、冬の訪れの北風が吹き込み、焦る私の気持ちを押ししてくれました。